

25周年記念誌

ISSN 1910—2396

—北海道—
野鳥たより

第 100 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成7年6月21日



ソリハシセイタカシギ 1994. 5. 29 苫小牧市 撮影者 山田良造

「野鳥だより」100号を迎えて

北海道野鳥愛護会会長 柳澤 信雄

「野鳥だより」が第100号を数えるに至りました。記録によると、会報第1号は昭和45年（1970年）2月、北海道野鳥愛護会の発足前に創刊されています。

これは、結成準備会が愛護会の結成時には出来るだけ多くの会員を集めようと、宣伝パンフレットの目的もかねて創刊号を発行したのだそうです。

その甲斐があって、本州会員も加わり、約500名の会員が集まり会は発足しました。

以来、会報の編集・発行に費やされた先人のご苦労と数多い愛読会員の言い尽くせぬご協力に対し、何と云って感謝の意を表わしたらよいのか、私にはその言葉を知りません。

現在、会の運営や会報の編集・発行にあたっておられる幹事の皆さんもふくめて、いろいろお世話くださりまことにありがとうございますと心からお礼申し上げます。

北海道野鳥愛護会も紆余曲折はありましたが、本年は設立25周年を迎えました。

巻から「愛護会はいつまでたっても同じ活動で変化はないし、会員数も400名前後とまったく代わり映えのし

ない会だが、どうなっているんだ。」と聞こえてきます。

そんな時、私は胸を張って、次のように応えたいと思っています。

「独立した事務所も持たず、専任の職員も雇えない会が25年間も続いたことは素晴らしいことなんだ。ここまで続いた最大のポイントは、あなたが言ったふたつを忍耐強く守ってきたことなんですよ。」と。

それぞれに生活している会員の中から有志を募り、ボランティア活動だけでここまで来られたことを私は誇りに思っています。

幹事会では、毎回のように会員増や活動内容の拡大・充実、そのための拠点となる事務所等が話題となり論議されます。

その度に派手な活動がなくても、目立たなくても無理をしないで会を永續させよう。あせらず、のんびりと楽しみながら息の永い活動を心掛けようと落ち着きます。

人材・事務所・活動の総てがボランティアの、このペースで北海道野鳥愛護会が30周年、50周年を迎えられることを強く願っています。

お祝いのことば

北海道保健環境部長 傳法 公磨

北海道野鳥愛護会々員の皆様には、日頃から道の自然環境保全行政の推進につきまして御協力をいただきありがとうございます。本誌面をお借りして厚くお礼申し上げます。

さて、このたび、貴会が創立25周年を迎えられますとともに、機関誌である「野鳥だより」が創刊第100号をかぞえられるに至りましたことに対し、心からお祝いを申し上げますとともに、これまでの会員の皆様の御努力と御労苦に衷心から敬意を表する次第です。

貴会のこれまでの歩みを振り返りますと、昭和45年5月に会員43名で発足され、「野鳥だより」を定期的に発刊されるとともに、シギ・チドリ類の生息状況調査への協力や、採鳥会及び自然に親むつどいの開催、野鳥写真展の開催など、様々な事業を幅広く展開されてまいりました。これらの事業の実施を通して、本道の野鳥愛護思想の普及啓発に貢献されてきたことは、まことに意義深いものがあると考えております。

本道は豊かな自然に恵まれておりますが、野鳥をはじめとする野生生物は、すぐれた自然環境を象徴するものとして、その存在価値に対する認識は益々高まってきております。これらの野生生物については、その多様性を損なうことなく、生息環境とバランスのとれた形で将来に渡って適正に保全するとともに、次代に引き継ぐことが、我々の責務であると考えます。

このような観点から、貴会がこれまで進められてきた各種の事業は、本道の野生生物の保護施策の一翼を担うものであり、道民に野鳥保護思想を広めるとともに、自然を愛し、大切に育む気持ちを育てるものとして、極めて重要であるものと考えております。

貴会が、今後とも精力的に各種の事業を展開されまるとともに、引き続き本道の自然保護思想の普及啓発の推進に寄与されますことを、心から祈念申し上げ、お祝いのごことばといたします。

愛鳥・愛人

元副会長 土屋文男

北海道野鳥愛護会が発足して、本年度で25周年を迎え、更に会誌は第100号に達したとのこと、まことにおめでたいことです。「光陰如箭」と申しますが、往時を振り返って実に感慨無量のものがあります。

現在は野鳥の図鑑や、野鳥に関する図書、写真集、又アウトドアー・グッズが氾濫し、さて、どれを選ぼうかと迷うくらいです。当時は適当な野鳥のポケット図鑑もなく、「バードウォッチング」などと言っても知らない人々には理解してもらえませんでした。

学術的な面では「日本鳥学会」があり、古い団体としては「日本野鳥の会」が存在し、戦後、「日本鳥類保護連盟」が創設されましたが、何れも道民にとって身近な組織ではなかったようです。

ただ、小さな集りや、学校教育の場に於ては野鳥保護に関する試みは行われておりました。「小鳥の村」がそれです。

現在の南区にある藤の沢小学校では、熱心な学校関係者によって野鳥保護の精神が広くPRされました。私有地を解放し、餌台を設けたり、市民やマスコミに対し幅広く広報活動されたのは、故小沢広記氏であったことは、会員の皆さんのよく承知されているところでしょう。

題名に掲げた「愛鳥・愛人」という言葉は、この藤の沢小学校のモットーであり、この学校が当時記念出版した『育てて』『すばこ』に詳しく記載されています。

たまたま、別の団体である(財)日本野鳥の会が、昨年創立60周年を迎え、21世紀に向けての「心」として「地球を愛し、鳥を愛し、人を愛する」をモットーとしようとして発表していますが、偶然の一致でしょうか。

昭和36年5月になって旧豊平町が札幌市に合併され、私と「小鳥の村」との結びつきは深まって行きました。

さて、昭和44年頃、何れの団体の支部組織ではなく、全道の野鳥愛好者の連絡組織として、野鳥に関する情報の交換や、資料の提供と保存、更には野鳥保護思想を全道に普及するために本会が設立されました。

記録によると昭和44年11月18日、設立準備会が開かれ、会の名称を「北海道野鳥愛護会」とし、事務局を道林務部林政課猟政係内に置くこと、会誌として『野鳥だより』を発行することが決定。会長には犬飼哲夫氏の予定で、昭和45年5月9日設立総会が開催され、犬飼哲夫会長の下に役員が決定し、新しいスタートとなりました。私事になりますが、私は道庁のご指名により設立発起人とし

て参加、犬飼、井上両会長時代、副会長を勤めさせていただきました。道庁の当時の係長の安田鎮雄氏はじめ、係のスタッフの方々には大変な努力とご苦労をおかけしたことを思い出します。

初期の活動については、昭和58年2月21日に発行された50号記念特集『野鳥だより』に「あゆみ」として概略が掲載されておりますし、特に1-49号の記事の総目録がついておりますので新しい会員の方はご覧下さい。

発足以来、経理面、会誌編集、事務所の移転問題では少々紆余曲折もありましたが、会員お一人お一人の努力によって見事に解決し、本来の目的を達成しつつ、今日に及んでいることはご同慶にたえません。

私は昭和46年6月、ヨーロッパを訪ねる機会があり、イギリス、イタリア、スイス、チェコスロバキア、デンマーク、ドイツ(西)、オランダ、フランスの一部に行きました。野鳥に関する住民の関心、書物の出版、野鳥に関わる施設の状態は、当時のわが国のそれとは雲泥の差がありました。「日本にはサンクチュアリは何か所あるのかネ?」と質問されるのには弱りました。イギリスではエリザベス女王を総裁とする王立鳥類保護協会(RSPB)の会員は32万人、所有するサンクチュアリは実に60カ所を数えていたのです。(当時の日本野鳥の会会員数15,000人)

努力が実って1億円の募金予定の7千万円集まった所で、本道のウトナイ湖に第1号が決定、発表のセレモニーは東京のソニービルの会場と、私の医院の電話を継いで行われましたのを、昨日のこのように思い出します。

昭和54年のことでした。完成は56年でしたが、愛護会の皆さんにも物心両面でご協力いただいたことを感謝しております。

北海道の自然も急ピッチで破壊の方向に進み、野鳥たちも安住の地を失ないつつあります。人間は豊かな自然を未来に引き継ぐ義務があります。

北海道の雄大な自然にふさわしい北海道野鳥愛護会が益々発展され、独自性のある会であり続けていただきたいと思います。会員の皆さんのご健祥を祈ります。

〒062 札幌市豊平区福住1条8丁目10-13

私の25年

元副会長 齋藤春雄

北海道野鳥愛護会が創立25周年を迎えるというが、この四半世紀の世の中は随分変わった。しかし、この会の柳澤会長の人柄もあろうが、地味に、しかし堅実に進んできたようである。これから野鳥の世界のために、益々業績を伸ばして行って戴きたい。

さて、自分の25年間をかえり見ると、その間には良いこともあったが、悪いこともあった。その中の一つとしては、平成5年5月下旬、自宅の居間で転倒し、左大腿骨内側頸部骨折となり、手術、入院2ヶ月以上という私としては生れて初めてのこととなった。幸い個室があったのでこれに入ったが、このために何かと助かったのである。実は、今でも道新の夕刊で見られている「私のなかの歴史」というのを引受けていた。これは自分で原稿を書くわけではなく、聞き手の記者と会って話をし、適当に書いて貰うのであるが、その面会の2回目を終った途端に転倒、入院、手術と相成った次第で、それを知った記者の人も恐らくびっくりし、心配したことであろう。

しかし、個室のおかげで、手術後何日も経ずして会うことができた。とにかく、その後何回か会い、そこはベテラン記者だけに、どうにか11回分をまとめてくれた。

聞きとり中に、私は写真を見つけることにしていたが、途中でへたばったので書斎の中を探しまわることも出来ず、したがって記事の内容もかなり変わったものになった。

私の入院は家族の外は、別の原稿の仕事で打ち合わせ人の数名しか知らせなかった。それで、この記事を読んでくれた方々は、いづれも手紙で「元気で結構」と言ってくれた。まさかこれが病院の中で作られたものとは思わないのが当然であろう。しかし、電話をくれた人には本当のことを話して迷惑をかけた。

傷の治療は順調に過ぎたが、手術後何回も撮影したレントゲンの写真を見ると、腰と上肢のところに大きな人工骨が入っていることが分った。とにかく大きいのである。この大物を体の中に入れて、これからの余生を共生していかなければならぬとは、85歳の私にはやり切れぬ思いである。

患部は違和感や痛みはないが、今度転んだらひどいことになるかと分っているので、毎日が緊張のし続けである。この2年間は家の中では歩行器を使い、外出は右手に杖を、左手は誰かにしっかり支えて貰って歩いている。

この外出は、200メートル位歩くと全身が苦しくなり休まなければならないから実用にはならない。今では月

に一度、病院の内科の治療を受けに行く程度。大切な集まりにも不義理を重ねて申訳けない次第である。

野鳥とのつき合いは、この25年間には特に多いとはいえない。私が全力をあげて頑張ったのは、タンチョウ、オオハクチョウ、オジロワシ等の保護増殖で、これは今より30年から50年位前のことで、それ以後は順調に地元の人達により実施されて私の出る必要は少なかった。と言って一般の野鳥とのつき合いは、それ以後にむしろ多くなって、北方鳥類研究所の人たちと共に各地の分布、繁殖等を調査したり、自然保護運動に参加したり結構この25年間は忙しかった。

私は現在の土地に移って45年になるが、ここは円山公園の入口まで直線にして200メートルもなく、私にとっては円山は通常の散歩区域になっている。

当時は鳴期に公園の入口に来ると、ワッとばかり鳥の声に頭をつつまれたものである。私の家は狭いが庭があり、5本の大形のオンコを主体に、サクラ、ウメ等の庭木があるが、ここには多くの野鳥が集まってくる。緑のない冬期間でも、そこに樹木があるということだけで集まってくるのである。

ところで、この庭に目下異変が起きている。昨年の秋から1羽の鳥も現われないのである。否、1羽は毎日現われていた。それはハシブトガラスである。このカラスは1日数回庭の北側から南にかけて飛んできて、オンコの木にとまり、2、3回枝移りするとパッと南の空に飛び去ってしまう。この間20秒とかからない。とにかく、これが続くのでカラスより小さい他の鳥たちは来なくなった。要するにこの庭は1羽のカラスのテリトリーになってしまった。春になると毎朝うるさいほどのスズメの囀りも、満開のサクラにつくヒヨドリやかましい声も今年は一切聞かれないのである。

ところで、小鳥と共に春になると、このカラスの姿も見れなくなった。恐らくどこかで営巣し、子育てに専心しているのであろうが、これを機会に私の家の庭を忘れてもらいたいものである。

〒064 札幌市中央区北3条西29丁目
(北方鳥類研究所・所長)



いろいろ教えていただいたこと

元副会長 新妻 博

転勤で東京の世田谷区代田に住むようになって、まっ先にしたことは日本野鳥の会東京支部への加入でした。冬季札幌オリンピックの三年ほどまえの事でした。そのころの東京はバードウォッチングの良い場所に恵まれていて、支部の例会は明治神宮外苑、多摩霊苑、高尾山(八王子市)と決まっています。マジメにやればほとんど毎週でも鳥を観察することができました。特に印象深いのは千葉県谷津を中心としたシギ・チドリ探鳥でした。そのために当時はプロミナーと呼ばれていたスコープを一台購入しました。もともと機器に弱い私にもこれはどうやらもて余すこともなく、なにしろシギ類は山野の小鳥のように枝移りなどしませんから三脚をしっかり立ててじっくり観察することが出来たわけです。八月の末ともなればもう渡ってくるハマシギやらこまごまとしたシギチの仲間たちが干潟に混成してウヨウヨしているのですから、ほんとうに素晴らしい眺めでした。中でもホウロクシギの英姿には圧倒されました。あんまり長い時間シギチに夢中になって観ていたので顔も手も日焼けして、当分はつらい思いをしました。東京の海辺の八月末は酷しいものでした。二年ほどで札幌に戻りましたがシギチの魅力が忘れ得ず、先づ手始めに石狩河口に出かけました。オリンピックを翌年に控えた秋のことです。当時の石狩は河口に向けて干潟がかなり散在し、頃あいの探鳥場がありました。とくに左岸の燈台近くなどは深いヨシの繁みにかくされていてシギたちにとっては都合のいい餌の採り場所でした。そこへ初めて足を踏み入れた私は、ほとんど勝手を知らぬことから、おっかなびっくりのしていたらくでしたが、有難いことに少し遠方に先客がいて三脚付のスコープを肩にしているではありませんか。私は先づスコープを固定して、そこに焦点を絞りました。そこに現れたのはまさしく二人の女性バードウォッチャーです。そのとき私はとっさに「アッ!あれは萩さんだ」と直感しました。当時、道の林務部で発行していた『林』という冊子のグラビアにシギなどの写真を発表していた萩千賀さんのことは頭の中に刻みこまれていたからです。

シギ類、チドリ類についてはなんの知識もなく経験も持たない私としては萩さんに教えを乞うのが一番の近道ですから、躊躇なく近付いてご挨拶をしました。

『萩サンデスネ』まるで旧知のような顔をして声を掛けますと、『イエー 萩サンはこの方デス』びっくり

しました。まるで少女のようなお顔で、小柄の女性が萩サンで、もうひとりの充実した体躯で笑みをたたえていられるのは羽田恭子さんでした。あのころはお二人とも若かった、そして元気一杯だった。しかし萩千賀さんはもう此の世にはおられません。私が札幌に帰ってきて最初に使ったスコープ、そのクローズ・アップの画像が二人のと言うべきか二羽のと申すべきか? 探鳥のベテラン、羽田さん、萩さんという♀印だったのです。この話はどこかで、どなたかにおはなしていますので旧聞に属するかもしれませんが、シギチの手ほどきをして下さった恩人として忘れることはできません。あれからもう23年、『野鳥だより』はもう少し前に創刊されていましたから、25周年そして100号、言われてみればひとしお感無量というところです。

『野鳥だより』は創刊号から保存しているはずですが、それは当時、道林務部で猟政を担当されていた斎藤春雄さんからバックナンバーを頂いたからです。私はいまでも『こんな立派な出版物を刊行している会だし、ベテランのリーダーもたくさんいて、それで年会費2千円也は安いもんだ』などと冗談をとばしビギナーの方を誘っているのですが、老齢の方は足が重く、若者はほかのレジャーで暇がないらしくて仲々話に乗ってくれません。

むかしを語れば色々ありますし、長くなりますから此のあたりでペンを納めたいのですが、書いて置かなければ、すべては忘却の彼方へ流れ去ってしまいますので、もう少々書き添えて置きます。

私の心のうちにもっとも忘れ難いのは斎藤春雄さんです。さきにもすこし触れましたが、そのほかに、戦後しばしラジオ放送にかかわりのあった私に鳥の情報を取りついで下さったばかりか、数多くのことを教えて下さったことは有難いしあわせでした。斎藤さんはお仕事のことばかりでなく文才のある方ですから野鳥そのほかについての著書も少なくありません。お話もわかり易くハッキリされていますので放送には欠かせない方。また新聞の記者などは鳥についてわからない事があれば必ず斎藤さんの所へ聞きに行き、それが翌日の新聞に掲載されました。いまの言葉で言えば人気タレントの風格を備えた方です。著名な犬飼哲夫先生、野幌の主と言われエゾミユビゲラの発見で知られた井上元則先生、声の仏法僧即ちコノハズクで有名な山梨の中村幸雄さんなど多くの野鳥研究の先達を私に紹介して下さいました。斎藤さんで

す。斎藤春雄さんは今もお元気と拝承していますが近ごろ足が不自由であり外出はされないとか、それが残念です。国立公園管理のレンジャーとして各地で活躍の百武充さんはひところ道庁にも赴任されましたが、そのころ、柳沢信雄さん、羽田恭子さんなどが集まって仮の名を『百武学校』道内はもとより本州各地、石垣島にまで歩を伸ばして観察指導を受けました。昨年（1994）は上高地の鳥たちを楽しみました。百武充さんも北海道野鳥

愛護会のために力を貸して下さった大切な人です。

日本野鳥の会札幌支部が発足したのは昭和10年ごろと記憶していますが、なぜかその活動がゆるやかになり戦中はもとより戦後になってもほとんど活動が行われていませんでした。その間（戦後）のブランクを埋めたのが北海道野鳥愛護会でした。とにもかくにも25周年、そして『野鳥だより』100号おめでとう存じます。

〒005 札幌市南区真駒内南町1丁目6の1

野鳥だより

—北海道—

第 1 号

編集者 北海道野鳥愛護会設立準備会

発行者 北海道国土緑化推進委員会

発行日 昭和45年2月10日

野鳥は人類の文化財

野鳥愛護会準備会長 犬 銅 哲 夫

ひところ野鳥類は、山紫水明といわれた日本では、その数においても、種類においても、ひじょうに豊富であったのです。ところが国土の開発が進むにつれ、どんどん自然がそこなわれ、野鳥のすみ家もせぼめられ急激にその数を減じてしまいました。

野鳥を愛する風習は古い伝統があり、各種の民話や、情緒的な文学の中に民情と深いつながりをもつて随所にあらわれています。それは野鳥類が自然物として、人間よりはるかに古い起源をもち、しかも人類の友としてその繁栄を支えてきたからです。

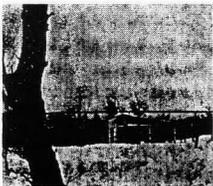
野鳥類は、自然界の平衡を保ち、人間生活にうおいを与えておりますが、とくに最近では、農薬によるいろいろな公害が発生し、世界的な問題となっており、そこで山野における有害動物駆除の役目が大きく買われてきました。

野鳥類に限らず、自然物はたいなる人類全体の文化財であり、過去から未来に引きつぐべき義務を負わされています。このため先進国といわれる国々では野鳥保護は広範な国民運動となっており、国政の重要な一翼として進められているのです。この会が本道の野鳥愛護運動の推進力として多くの会員の参加を望んでやみません。

（北大名誉教授）

尾岱沼に白鳥保護センター

根室地方の尾岱沼（オダイトウ）には、毎冬1万羽近いオオハクチョウが飛来し越冬しますが、このうち傷ついたり、疾病のため保護を要するものも少なくありません。これを保護して元気にシベリヤへ旅立たせるため、別海村の尾岱沼に、道費補助による「白鳥保護センター」が建立



道民の鳥「タンチョウ」

タンチョウの繁殖地はウスリー川・アムール川流域のシベリヤ東部、中国東北部に広がっておりシベリヤ・中国のものは、中国南部、朝鮮半島に渡り越冬し、日本にもごく少数鹿児島県出水市のマナヅル、ナベヅルの越冬地に飛来することがあります。いつぼう釧路湿原に繁殖する北海道のタンチョウは、冬になると、繁殖地周辺の農耕地にえさを求めて移動しますが、渡りはせず、シベリヤのタンチョウとの交流は認められていません。

北海道のタンチョウは、一時、絶滅の危機におちいりましたが、多くの人々の献身的な努力で救われ、昭和39年9月1日「道民の鳥」に指定されています。

されることになり、12月の道議会で予算が計上されました。

施設は 625平方メートルの金網のゲージで、ゲージ内には病舎や、直径16メートルの円周の池などが設けられます。

野鳥だより
第一号

「熱血」愛護会

佐藤 ひろみ

先頃、愛護会の大先輩より“野鳥だより”を第一号から見せて頂く機会がありました。それはセピア色に変色し、とじるための二穴もないため、簡単に十字に束ねてありましたが、書かれた内容は古びることなく、また創世紀の頃の皆さんの熱意がひしひしとこちらに伝わってきました。道庁の先導があったとは言え、新しい団体を創設し軌道にのせるということ、小論文とも言うべき鳥に関する研究や観察記録など、確かな礎があればこそこの25周年であり、通巻100号だと思います。

会費の大半は印刷代や郵送料に費やされる上での運営は、「鳥への熱意」そのものです。私が愛護会に入って3～4年ですが、会員の皆さんの熱意はちょっとヘンです。キチとも言うべきもので、シーズンともなれば、石狩川生振地域、宮島沼、札幌周辺の沢などはたちまちサロンと化し、コムケ湖や湧沸湖でばったり会うこともあ

るのですから…。そして恐ろしいことにこの熱病は感染性があるらしいのです。そこまで人をとりこにする鳥の魅力と、「鳥」という共通項があるだけの緩やかなつながりが心地良いのかも知れません。

会の活動は札幌中心になりがちですが、北海道野鳥愛護会の名に沿うよう、地元の会員の熱心な活動にも目を向けるべきと思います。また遠くの探鳥地だけでなく身近な公園の朝の散歩もおすすめです。私の家の近くには下草が刈り取られ立派に整備された豊平公園がありますが、4月21日クロッグミ初認、5月12日ヒレンジャク7羽など観察でき、そんな朝は気分最高です。しかし隣の豊平墓地跡は体育館建設予定であり、また樹がなくなりそうです。いずこも同じく開発の波が押し寄せてきますが、いつまでも鳥を見続けていきたいと考えています。

〒062 札幌市豊平区平岸4-2 3-15 A-205



北海道の鳥

地球上の鳥の種類は約8600種、このうち日本産のものが440種、そして本道には350種が分布しています。

このなかには極めてまれにしか発見の記録のない迷鳥や、不規則にしか渡来しないもの、また本道で繁殖しているが、エゾミユビゲラのように生息地域が限られ個体数が非常に少なく、容易に発見のできないものも含まれていますが、いずれにしても野鳥の豊庫といえます。これにはいろいろな理由がありますが本道の気象条件や、地理的な現象が考えられます。

繁殖期に道南、道央の各地が本州方面と大差のない野鳥の生息環境をつくっているとき、道東・道北方面では極地の海鳥繁殖地と大差のない光景を見ることができます。この気象条件に、海岸から高山までの垂直分布、また原野、湖沼、耕地などの生息環境の変化、季節によつて較差の大きい気象変化が加わり、本道の野鳥の生息環境を複雑にしているからです。

また、津軽海峡を境にしたブラキストン線によつても、本州と本道の間には大きな種類の変化がみられます。これからはこの欄で、全道各地の話題を集め、野鳥の勉強をしてゆくことにしましょう。

野鳥だより第一号より転載

「野鳥だより」100号を迎えて

北海道野鳥愛護会 会長…柳澤 信雄……………	2
お祝いのことば……………北海道保健環境部長…傅法 公磨……………	2
愛鳥・愛人……………元副会長…土屋 文男……………	3
私の25年……………元副会長…齋藤 春雄……………	4
いろいろ教えていただいたこと……………元副会長…新妻 博……………	5
「熱血」愛護会……………佐藤ひろみ……………	7
香港探鳥会に参加して……………井上 公雄……………	8
香港の鳥達との出会い……………梶浦孝純・早坂泰夫……………	10
平成6年度総会報告……………	12
斜里川にクビワキンクロ飛来……………中川 元……………	14
ワキアカツグミが来た！……………森 純子……………	15
愛護会のあゆみ……………	16
北海道野鳥だより総目録（第80号～100号）……………	19
探鳥会報告……………	21
鳥民だより……………	24



も く じ

北海道野鳥愛護会 25周年記念 『香港 探鳥の旅』

香港探鳥の旅に参加して

井上公雄

新千歳午前10時発、約5時間で曇天の香港に着く。諸手続きを済ませ、現地ガイド李さんの案内で早速香港公園へ。園内へ入るや、驚く程の鳥が右に左に前に後ろにと、ぶつかりやしないかと思う程近くを飛び交い、まるで鳥に襲われる感じさえする。初めて見る香港の鳥ばかり。用意して行った図鑑を開いては見たが、次々に現れる鳥に目移りして、カササギの他は識別に迷わされ茫然として仕舞う。これ程一気に多数の未知の鳥に遭遇した経験は初めてで、鳥漬けになって仕舞った興奮に、混乱した自分が悔いられる。

冷静さを取戻し、漸くコウラウン、シロガシラ、カラムクドリ、カノコバト等の識別は出来たものの、日本の図鑑を見る様な訳には行かず、多数種を観察しながら確認種の少なかったのは、夕方と時間的事情のためとは言え残念でならなかった。此の公園は周囲が数十階の高層建築が林立する中の一角の、さして広くない傾斜地に在って、その中央に観鳥園があり、ゲージの中には東南アジアの鳥が放し飼いになっています。時間の都合で入園は後日の楽しみに残し、次いで香港の展望が最も美しいと言われるビクトリアピークへ。急カーブを繰り返しながら勾配を登るに従い、眼下に展ける摩天楼の世界。生憎、雲が低く中腹の展望台からの眺望になりましたが、平地の少ない地形で丘段状の起伏の多い地上から、細い高層建築が、あたかも生え出して来たかと思われる様なビルの林が視界一杯に広がり、目を見張るばかりの素晴らしい展望に、暫し感動の時を過ごしました。香港初めての夕食四川料理も程良い味つけに舌鼓をうち、夢心地の興奮と感動の一日は更けました。

第2日は待望のマイポーでの探鳥です。8時ホテル出発、間もなく運河の橋を渡る。次々に飛来して来るコサギ、ダイサギ等が岸辺に白い点々となって連なっていく。目的地迄の約40分の車窓からの沼湿地には多くのカモ類、ダイサギ、コサギ、アカガシラサギ等が極当たり前に見られ、胸が弾む思いでした。やがて雑然とした民家や廃車置き場等の混在する集落を過ぎると、何枚もの養魚池が見え始め、目的地も間近です。池の周囲には大小各種

のサギ類カワウ等が多数。排水溝、湿地にはトウネン、イソシギ等、頭上には行き先も定まらないカモ、大小様々なサギ類が飛び、ツバメ、アマツバメ、ハリオアマツバメが乱れ飛び、鳥の中をバスが行く様な感じに、すぐにもバスを降りて仕舞いたい気持ちになりました。間もなくマイポーのネイチャーセンターに到着。聞き馴れない色々の鳴き声と共に様々な鳥が、樹から樹へ、屋根から樹へと目まぐるしく飛び回り、種類も数も多いのに驚くばかりです。昨日覚えたばかりのコウラウン、シロガシラ、カササギ。屋根や軒先にスズメ、聞き馴れたシジュウカラはどこから来たものなのでしょうか。賑々しい鳴き声でメジロの存在はすぐ分かりました。鳥の多さにネイチャーセンター周辺に釘付けになりそうです。思い切って保護区の方へ向かおうとしましたが、狭い樹の繁みの中からの鳴き声が気がかりになり、探しても徒に時間を費やすばかりで諦めました。少し行くと、樹上にコサギ、アカガシラサギが10羽余り止まっていた。こんな様子を見るのは初めてで、珍しさについて見入っていると、カササギ、カノコバト、シキチョウ等が次々に寄って来た。池の周りにコサギ、カワセミがいて、シロハラクイナが慌てる様に繁みの中へ姿を消す。更に進んで行くと民家の屋根、軒、電線等に多くの鳥が頻りに動き回っていた。鶏小屋の餌を目当てのカラムクドリ、コウラウン、シロガシラ、カノコバト等の他、電線にタカサゴモズも、次から次へと現れ、探鳥ではなく観鳥と言う感じ。これはと見ては図鑑、又見てはと、見る度毎に図鑑と睨めっことで、忽ち40種を越え、記録は延びて行くばかりです。少し行くと、樹と言う樹にカワウが鈴なりに留まって何処までも続いていました。恐らく万を越える数ではないでしょうか。

湿地帯へ入りますと、葦原のあちこちから聞き慣れない色々の鳴き声が聞こえて来ますが、何故か姿は見つかりません。次々とセッカ、センニユウ、ハウチワドリ、ムシクイ等の仲間と覚しきものが、地を這う様に飛んでは素早く草原に潜り込んで、とても識別どころでないのが残念でしたが、ノビタキだけはすぐ判別出来ました。進んで行く中、マングローブの合間の沼にはカイツブリ、コガモ、ヒドリガモ、カルガモ、他のカモ類も見られましたが、何れも見慣れた美しい姿でないのは越冬中の故でしょうか。

やがてフェンスで仕切られた国境線のゲートを特別に

越え、中へ入ることが許された。マングローブの間の流れにドラム缶状の物を組合せた浮き木道を渡ること10分余り、干潟の観察小屋に着く。干潟は干潮のため遙か彼方まで広がり、到る所に各種のシギ・チドリが散在していた。香港は各種鳥類の越冬地として知られている。中でも此のマイポー自然保護区のクロツラヘラサギ、ソリハンセイタカシギ、及びハイロベリカン等の集団越冬、ツクシガモ、ミヤコドリ、ヤマショウビン、アオショウビン、ヒメヤマセミ等、北海道では滅多（絶対）に観察出来ない種類に数多く出会える所として、ツアー最大の探鳥地として関心と期待が大きかったが、都合で充分な観察時間をとることが出来なかったのが残念であった。しかし、ヒメヤマセミを除いた前述の種類以外にも13～4種のシギ・チドリ、各種サギ類、ミサゴ等の観察が記録され、曇天とは裏腹に誰もが明るい表情に喜びの会話を交わしながら湿地帯を抜け出し、養魚池の辺に出た。周囲にはカワウ、サギ類がたむろ。クイナでも出て来そうな雰囲気である。間もなく水草の間からバンが3～4羽現れたのに続いて、少し離れた所から、前額の白が特徴のオオバンも姿を現してくれた。オオバンとの出会いは初めてである。バンの観察は何回かして来たが、非常に神経質だと言う印象が強く、観察には細心の気配りをして来たものですが、此处では両種とも意外に無造作に姿を見せてくれました。午前中約7～8kmの行程も終わりに近づき、快い疲労と空腹を感じながら保護区入口の監視小屋近く迄戻って来た時、ジョウビタキに出会う。僅か1～2分の出会いはあったが、長年ジョウビタキを見たいの思いが、頭から離れなかった私にとって、ジョウビタキがいる、との声から自分の目に入るまでの間のもどかしさ、見つけた時の嬉しさは、昨日から今日へ初めての鳥との様々な出会いの喜びと感動を重ねて来たが、それとは又別な思いでその姿を追い続けた。ここで昼食のため中断、再び戻って午後は各自思い思いの探鳥を時間の許す限り楽しみ、マイポーを後にする。

夕食後、今日は雲が高く、山頂からの展望が出来ると言うので、ピクトリアピークからの夜景観光へ。海拔397mからの夜景はまるで光の樹海を眺める心地だ。海を挟んだ対岸の九龍地区の街並も、光の饗宴となって観光気分を十分に堪能、ホテルに帰ったのがなんと11時半近く。早速、一室に集まり、今日の鳥合わせの結果84種が記録され、探鳥そして、観光ともに充実、満足の日を過ごした。

25日（土）低い雲に覆われた暗い朝を迎えた。予定通り8時出発、タイポー自然保護区へ向い、約30分で目的地に着いた。バスを降りると、樹冠部を多くの鳥が渡り飛んで行くのが見られた。此处は森林の自然保護区で山野の探鳥になり、早速、林道の坂道を登り始めた。前方

の林が異様に騒がしく、人の気配に野性の猿が7～8頭、警戒しながら移動して行くのが見られた。次々と高い枝先辺りを渡り飛んで行くのが見られ、時々低い枝にも姿を現す。生憎降り出した霧雨と暗さの悪条件にシルエットだけでは確かな判別も出来ず、いらいらが募る。暫く行くと、狭い柑橘畑がポイントになって、コウラウン、シロガシラ等が集まっていた。垣根にはハイビスカスの花が咲き、この蜜を求め小さな鳥に注目が集まる。霧雨が恨めしく思うなか、頭部が翡翠色、頬、喉が鮮やかな紅色、細長い嘴が下に湾曲、全体が薄緑色の小鳥が、花にすがりつく様にホバリングし蜜を吸う。此の様な様子はテレビでは見ていたが実物は初めてで、霧雨の暗い中でもその美しさは素晴らしく香港探鳥のハイライトに。此处では他にカラアカハラ、サンジャク、ハッカチョウ等20種を記録し次に向かう。

九龍地区北部に広がる新界地区ののびやかな田園風景、丘陵地帯、高層ビルと活気溢れる喧噪な街と言うイメージとはかけ離れたもう一つの香港に出会う。バスの窓から民家の周辺にカササギ、コウラウン、シロガシラ、タカサゴモズ等を確認し、目的地に着く。集落を外れたならかな耕作地と空地の中を、導水管が縦断する他、何もない寒村である。霧雨が降る悪条件に成果は望めないと思えたが、ピンズイ、タヒバリ、ベニサンショウクイ、オオルリチョウ、ガビチョウ等22種を観察する事ができた。

続いて新界地区を抜け、初日入園できなかった香港公園の観鳥園に行く。自然の沢地に覆いを架けた様なゲージの中に、90種600羽の主に東南アジアの鳥が、あたかも自然に生息しているかの様に飼われていた。園内に入ると、回廊風の本橋を渡りながら何処からでも観察し易い様になっている。カンムリバトを始め、ベニバト、九官鳥、コウライウグイス、ロビン等の他、亜熱帯性の鮮やかな色彩の色々な鳥が自在に飛び回り、美しい声や奇妙な鳴き声等が入り乱れ、周りが鳥で一杯で、時間の過ぎるのも忘れる幸せな一時を過ごした。

夕食後、鳥のガイドのため同行して下さった三浦二郎先生の70才の誕生日を観光船でお祝いしようとの発案で乗船。唄や踊り、マジック等のショーの中で、三浦先生のハッピーバースデーの大合唱となって盛り上がり、先生も感激の御様子でした。海上からの夜景は山頂からの眺望とは又異なった趣です。四面の雛壇状の光の森が水面に映え、巨大な光のカーテンに閉ざされた香港の夜景を脳裏に刻みながら最後の夜を楽しく過ごしました。

仕事も留守中のことも忘れ、昼は鳥、夜は観光にと多くの楽しい思い出を残し帰国の朝を迎えました。ホテル8時出発、最後の探鳥のため、九龍公園に立ち寄る。此处は九龍地区の繁華街に囲まれた公園で、香港には珍し

く平坦地の広場で、国際都市らしく東南アジア系の外国人が多く、老若男女、ラフやオシャレなスタイルありで、ベンチで休む人、寝てる人ありの中で、太極拳をするグループも見られ、やはり香港だなーという印象でした。園内は博物館、樹木、広場、噴水、花壇、水鳥池、鳥類園等が在って、騒々しい街中を忘れさせる憩いの場です。

香港の鳥達との出会い

梶浦孝純・早坂泰夫

札幌の鳥も満足に観察していない自分にとって、まだ見たこともない外国の鳥を見て、その種と生態がわかるだろうか、いや、こういう機会はめったにないから南方の珍鳥と会ってくるのも自分のスコープとして、これからの話題の種になるかもしれないという心の気流をもちながら、北海道野鳥愛護会25周年記念・香港探鳥ツアーのメンバーとして、厳寒の2月23日、新千歳空港10時発のキャセイ・パシフィックCX481便に搭乗しました。

今回のツアーは、香港の冬鳥ウォッチングとしては、2月がベストシーズンであること、様々な環境で多種多様な鳥の生態が観察できるということで、世界自然保護基金(WWF)の米埔自然保護区(MAIPO, NATURE RESERVE)の亜熱帯樹林の湿地・干潟を中心として、大埔自然保護区(TAIPO, NATURE RESERVE)の山麓森林地域、営盤村(YING, PUN)の農耕地域、九龍公園(KOWLOON, PARK)・香港公園(HONGKONG, PARK)の市街地自然公園などを観察地としてウォッチングすることになりました。

香港に向かう機内では、出発前に準備した「BIRDS of HONGKONG」に記載されている鳥達に想いを馳せながら、美人中国スチューワデスの温かいリセプションに誰もが心を踊らせていました。日本とは約1時間の時差がある香港へは約5時間ほどのフライトでしたが、大きなエアシェイクもなく、摩天楼が背伸びしているように建ち、ひしめく香港の市街を横目に啓徳空港に着陸しました。

2月の終わりを迎える南シナ海上の香港島は気温13~15度で、雨期に入っているようで、どんよりとした曇模様の市街地は何となく湿気のある感じを覚えました。3日間の各観察地では快晴に恵まれることはなかったのですが、この頃の天気としては、まずまずという状態で観察できたことは幸いだったと思います。

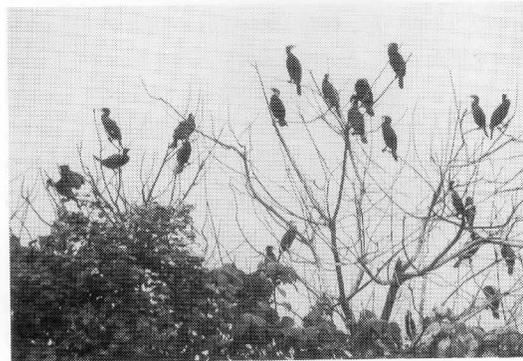
そこで、各観察地の様子と出会った鳥達を紹介します。
○2月24日-米埔自然保護区と中国広東省

何処を見ても鳥が目に入ると言う感じで、カササギ、モリハッカ、ハッカチョウ、シキチョウ等15種の野鳥観察の他、公園の珍しい飼い鳥等を見て周り、香港最後の一時を過ごしました。

〒062 札幌市豊平区西岡1条7丁目1-14

市街地から30分ほど離れたWWF事務所がある広場をゲートとした保護探索路は、中国との境を流れる深川河(SAN, CHUN, RIVER)によってつくられた大小の沼・マングローブが群生する湿地帯に連なっています。このような環境地では、とくに水辺に飛来、生息する鳥達を中心に、サギやカワウの仲間、シギやカモの仲間がのんびりとした姿を見せていました。

また、沼辺の草地にはジョウビタキやセッカなどの草原の鳥が見られましたが、ところどころにそびえ立つ樹木にカワウが黒い花を咲かせたように止まっている光景は、これこそ“鶴合の衆なり”と驚倒いたしました。マングローブの探索道をスコープを頼りに北へ進むと、深川河に沿って中国広東省との国境にぶつかりました。張り巡らされた国境の鉄条網をくぐり、長い板とドラム缶で作られた湿地に浮かぶ歩道橋を危ない足どりで進むこと約20分。木造の古い観察小屋があり、そこから見える広東省深川市の干潟地はさすが大陸と思わせるような広大なパノラマが展開され、日本では見ることのできないハイイロペリカンの群れや、ヤマショウビンの藍色のあでやかさが目に入りました。



ここで、観察・確認できた鳥達をあげてみますと、

☆日本でも見られる鳥(66種)

カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、ゴイサギ、ササゴイ、アマサギ、クロサギ、コサギ、チュウサギ、ダイサギ、アオサギ、ツクシガモ、オシドリ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、シマアジ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、トビ、ミサゴ、ヒメクイナ、バン、オオバン、セイタカシギ、コチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、ダイセン、トウネン、オオソリハシ

シギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、イソシギ、キアシシギ、キョウジョシギ、ユリカモメ、キジバト、ハリオアマツバメ、アマツバメ、カワセミ、ショウドウツバメ、ツバメ、イワツバメ、ビンズイ、キセキレイ、ハクセキレイ、ミソサザイ、コマドリ、ジョウビタキ、ノビタキ、セッカ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、カケス、カササギ、ハシブトガラス、コムクドリ、スズメ、アオジ

☆日本で稀に見られるか、記録のある鳥(20種)

ハイイロペリカン、アカガシラサギ、クロツラヘラサギ、ハイイロガン、サカツラガン、ミナミクイナ、シロハラクイナ、ミヤコドリ、ソリハシセイタカシギ、ズグロカモメ、キンバト、ヤマショウビン、シロガシラ、チョウセンメジロ、コウライウグイス、オウチュウ、コクマルガラス、ギンムクドリ、カラムクドリ、タカサゴモズ

☆日本では見られない珍しい鳥(10種)

カノコバト、オオバンケン、アオショウビン、コウラウン、シキチョウ、マミハウチハドリ、アオハウチワドリ、クビワガラス、クビワムクドリ、ヒメヤマホオゾロ

とにかく広大な環境だけあって、鳥の種も多く、一日だけの観察では惜しいような保護区でした。もう一度でいいから手弁当持参でゆっくりと観察したい心境でした。

○2月25日-大埔自然保護区

朝からあいにくの小雨模様でしたが、大帽山の麓にある自然保護地域に着きました。針・広葉混合樹林に つつまれた薄暗い山道は、天狗でも出そうなうっそうとした感じで、同伴の早坂先生としんとした周りの木々に目を見張りながら奥地に向かうと、川のせせらぎが聞こえる沢地にでたところで、ベニサンショウクイのあでやかな褐色の羽根が緑の広葉に映えました。枝を飛び交う姿は大帽山の主のような勇壮な感じを受けました。ここでは、数こそ少なかったのですが、チョウセンメジロ、メジロ、シジュウカラ、コウラウン、シロガシラ、オオバンケン、トラツグミ、カラアカハラ、サンジャク、カササギ、ハッカチョウ、エンビタイヨウチョウなど約20種ほどの確認をすることができました。中でも、頭部に夜光系グリーンの羽毛をつけて柑橘の木の間を飛び回っていたエンビタイヨウチョウは、自然の構成する最大のイラストではないかと思われるほど、感銘を受けたことと早坂先生が偶然に出会った台湾ザルをレンズキャッチできたことは、ラッキーでした。

○2月25日-営盤村

戦前の農村地帯を思わせるような質素な農家が点在する営盤村は、香港の生活状況がわかるような思いにさせられました。香港は水不足のため、自国で給水することができないため、中国本土から飲料水を引水していますが、その太くて黒い鉄パイプが農地の中央を連なってい

るのが、異様な光景でした。全体が野菜などの畑地になっているこの地域は、草原や灌漑に集まる鳥が見られました。

アカガシラサギ、カノコバト、ツバメ、ビンズイ、タヒバリ、キセキレイ、ベニサンショウクイ、オオルリチョウ、コウライウグイス、クビワムクドリなど約20種の鳥が観察できました。

○2月25日・26日-香港公園・九龍公園

東洋の真珠とまでいわれるビクトリア・ピークから展望する香港市街は、様々な構造の高層ビルが所狭しとばかり立ち並び、東洋の観光地としての近代的な様相を受け取ることができるが、いったん街中に足を踏み入れると、セントラルマーケットやユマティの商店街や露天街のように大小様々な店が立ち並び、行き交う人々の様子から庶民的な息吹きを感じとることができます。道路に我がもの顔のように張り巡らされた店の看板、その下をぶつかりそうになりながら往来する2階建のバスや電車、道端でトークする人や何かを食べている人など日本とは違った光景に驚かされます。そのような市街地の中に市民の憩いの場ともいえる公園があり、工芸館や植物園などの多様な施設が整っていました。とくに、香港公園にある鳥類館は、巨大な金網ドームでつくられ、原色の強い南方系の鳥達が放鳥されて訪れる人々の鳥とのふれあいを深めることができるようになっていました。



3泊4日の鳥との出会いは、様々な感動と、思いをもたらしてくれました。自然と鳥達の調和、日本に渡ってくる鳥達の確認、日本では見られない南方系の鳥達の様子、人工的でない保護区の素晴らしさなどいろいろと体験することができました。

バードウォッチングは単に鳥を観察することのみでなく、鳥の観察を通して自然環境のあり方、人間と自然との共存のあり方など知ることができると考えられます。今回のツアーはその点で地球サイドの一端を観察体験することができたと雪けむる千歳空港に戻ってきました。

〒005 札幌市南区石山528 札幌市立藤の沢小学校

平成6年度総会報告

日時：平成7年4月8日（土）午後2時～4時

場所：札幌市民会館 第6号会議室

柳澤会長の挨拶のあと、議長に小堀煌治氏を選出し、審議が行われ原案どおり可決された。

<議事>

1. 平成6年度事業報告

(1) 総務

ア 野鳥写真展の開催

- ・たくぎん自動サービスフロア（6. 5. 10～27）
- ・北電エレナードギャラリー（6. 6. 15～21）

イ 野鳥だよりの発送（96号～99号）

ウ 愛護会名入りのカレンダーの作成 150部

エ 野鳥スライド映写会開催（藤の沢 7. 1. 22）

オ 定例幹事会の開催（毎月第一水曜日）

カ 傷害保険の更新

(2) 広報

野鳥だよりの発行（96号～99号）

(3) 探鳥

探鳥会の開催（19回 参加者延べ631名）

歩こう会開催（7回 " 160名）

2. 平成6年度会計報告

3. 平成6年度会計監査報告 大野信明、佐々木武巳両監事の適正に執行されている旨の報告があった。

4. 平成7年度事業計画

(1) 総務

ア 25周年記念野鳥講演会の開催（5月20日）

イ 野鳥写真展の開催

- ・たくぎん自動サービスフロア（5月8日～27日）

ウ 野鳥だよりの発送（100号～103号）

エ 会員名簿の作成

オ 定例幹事会の開催（毎月1回）

カ 愛護会名入りカレンダーの作成

キ 新年講演会の開催（平成8年1月予定）

ク 傷害保険の更新

平成6年度決算書

(収入の部)

区分	決算額(A)	予算額(B)	増減(A-B)	摘要
繰越金	161,687	161,687	0	
個人費	814,500	844,000	△ 29,500	平成7年度以降の前受分を含む
団体費	5,000	10,000	△ 5,000	1団体
寄付金	4,000	10,000	△ 6,000	森田氏ほか
参加費	32,000	50,000	△ 18,000	藤の沢探鳥会
売上金	157,990	182,000	△ 24,010	野鳥だより(135,000円)、絵はがきほか
雑収入	12,127	2,313	9,814	利息、千歳探鳥会残余金
合計	1,187,304	1,260,000	△ 72,696	

(支出の部)

区分	決算額(A)	予算額(B)	増減(A-B)	摘要
印刷費	421,579	500,000	△ 78,421	野鳥だより(4回発行)ほか
通信費	202,733	200,000	2,733	だより発送費ほか
会議費	54,600	110,000	△ 55,400	幹事会、総会等
消耗品費	75,411	20,000	55,411	腕章、名札ケースほか
交通費	66,810	70,000	△ 3,190	だより発送、幹事の交通費
報償費	64,870	90,000	△ 25,130	事務所謝礼ほか
雑費	81,438	70,000	11,438	障害保険、写真展ほか
予備費	0	200,000	△ 200,000	
合計	967,441	1,260,000	△ 292,559	

(収支の部)

(収入) (支出) (残高)

1,187,304 - 967,441 = 219,863

内訳 会費仮受分 98,000
繰越金 121,863

(2) 広 報

野鳥だよりの発行（100号～103号）

・100号記念特集号の編集と発行

(3) 探 鳥

探鳥会の開催（19回）歩こう会（8回）

5. 平成7年度予算

6. その他

会費納入促進のため、6月と12月の年2回納入状況を郵便振込用紙を同封して送る。探鳥会などでの会費の授受には領収書を用意する。探鳥会の際に幹事は腕章をつける。懸案事項として、小樽港探鳥会の際のバス代の負担の在り方、役員等の慶弔に関する規定を設けていくこと等が論議され、今後幹事会で検討、成案を得てゆくことが決められた。

7. 役員選出

泉 勝統、千葉 広両幹事が退任され、梶浦孝純、早坂泰夫、伊東裕二の3氏が新幹事に選出された。

会 長 柳澤信雄

副会長 小堀煌治

監 事 大野信明、佐々木武巳

会計幹事 大町欽子、霜村耕一

代表幹事 白澤昌彦

総務幹事 ○渡辺紀久雄、井上公雄（兼任）、梶浦孝純、栗林宏三、渋谷弘子、清水朋子、早坂泰夫、三船幸子、村野紀雄、矢野玲子

探鳥幹事 ○井上公雄、栗林宏三（兼任）、竹内 強、戸津高保、富川 徹、富田寿一、永島良郎、中野高明、野坂英三、山田良造、渡辺俊夫

広報幹事 ○森田新一郎、赤石誠二、伊東裕二、佐藤ひろみ、白澤昌彦（兼任）、武沢和義、道場優、道川富美子

（○印は各担当の代表者）

平成7年度予算書

(収入の部)

項 目	前年度 予算額	予算額	摘 要
繰越金	161,687	121,863	会費仮受分は個人会費に計上
個人会費	844,000	820,000	2,000×410人
団体費	10,000	10,000	5,000×2団体
寄付金	10,000	10,000	
参加費	50,000	50,000	新年懇談会、藤の沢探鳥会ほか
売上金	182,000	180,000	野鳥だより、タイピン
雑収入	2,313	8,137	利息ほか
合 計	1,260,000	1,200,000	

(支出の部)

項 目	前年度 予算額	予算額	摘 要
印刷費	500,000	600,000	野鳥だより、名簿、チェックリスト
通信費	200,000	200,000	だより発送費ほか
会議費	110,000	110,000	総会・幹事会ほか
消耗品費	20,000	50,000	コピー、事務用品、封筒
交通費	70,000	70,000	野鳥だより発送、探鳥会幹事用等
報償費	90,000	90,000	事務所、講師謝礼ほか
雑 費	70,000	70,000	障害保険、写真展ほか
予備費	200,000	10,000	
合 計	1,260,000	1,200,000	

※会員数

項 目	5. 4. 1	6. 4. 1	7. 4. 1
個人会員数	426名	422名	410名
団体会員数	3団体	3団体	2団体

斜里川に クビワキンクロ飛来

中川元

日本では記録の少ないカモ類のクビワキンクロが、昨年(1994年)12月中旬から今年の1月中旬までの間、斜里川で観察されました。斜里川は知床半島の基部を南から北へ流れる川で、斜里町市街のはずれを河口がオホーツク海に注いでいます。

最初に確認したのは12月18日の午前中です。水面で休む20羽程のスズガモの群れの中に、スズガモやキンクロハジロとは少し違うカモが混じっているのに気がつきました。胸と腹部の境界の白色部がよく目立つのが第一の特徴です。周りのスズガモと同様に、このカモも首を背に回して休んでいたため、くちばしや頭部の特徴がなかなか見えません。時々頭を上げて周囲をちょこちょこ見回すと、またすぐに首を回してしばらくの間休んでしまいます。ただ、頭を上げた時、頭上が高く角張って見えることが「見慣れないカモ」の印象を強くしました。そして、何度目かに頭を上げた時、くちばしの根元と先の白色のリング、先端の黒色部が確認でき、クビワキンクロの雄であることがわかりました。太陽光の角度が良いと頭部が紫光沢を帯びて見えることもクビワキンクロの特徴です。スズガモと並ぶと頭部の光沢の違い(スズガモは緑色光沢)が良くわかります。斜里川は流れも緩やかで、群れは午後まで同じ場所に漂っていましたが、近くまで寄ってきましたのでじっくりと観察し写真を撮ることもできました。



その後、クビワキンクロは12月24日、1月6日など同じ斜里川河口や、隣接する斜里港内で何度か観察されました。河口周辺にはホオジロガモやマガモの群れもいましたが、クビワキンクロはいつもスズガモの群れと行動

を共にしていました。吹雪や雪の日はどこかへ移動するのか見えなくなり、天気が良いと現れるようです。最後に観察されたのは1月14日です。1月21日には流水が斜里海岸に着岸し、河口も港内も結氷、カモ類やカモメ類はほとんど姿を消しました。

クビワキンクロは北米のカナダや合衆国北部で繁殖し、冬は合衆国南部やメキシコに移動する鳥です。IWRB(1994)による推定個体数は96万8千羽で、安定しているようですので、北米では普通に観察される種なのでしょう。日本は通常の渡りルートには入っていません。ただどういふわけか、東京の上野公園の不忍池には1984年から毎年1羽の雄が飛来しています。国内で他に確かな記録はなく、「謎めいた鳥」(唐沢孝一著:都市の鳥)として紹介されてきました。不忍池のクビワキンクロは餌付けされ、近くで観察できるようになって写真もたくさん撮られたようです。水禽類の研究者で上野動物園に勤務されている福田道雄さんにお聞きしたところ、1994年のはじめにも飛来しているが今冬はまだ確認されていないとのこと、斜里川と不忍池の個体が別個体か同じなのかは今のところわかりません。

今回の観察が北海道で最初の確認になりました。一方、同じ斜里町に住む謝花栄昭さんは、北海道新聞の記事に載った写真を見て、同じ年1994年の3月に斜里川で撮影したカモがクビワキンクロであったことを知りました。撮影時には名前がわからなくそのままにしていたそうです。

この鳥が北米から本州まで渡って来るとすると、アリューシャン列島、カムチャツカ半島、千島列島を経由すると考えるのが自然です。クナシリに近い斜里を通っても不思議はありませんし、北海道の他地域でも今後観察されることがあるのではないかと思います。スズガモと一緒にだったということも興味を引くものがあります。スズガモの繁殖地はカムチャツカ半島などロシア極東部のほかアリューシャン列島やアラスカ、カナダ北部に広がっています。クビワキンクロは北米からスズガモと一緒に来たのでしょうか。それとも途中で合流したのでしょうか。単に斜里川と一緒にいただけなのでしょう。

3月下旬には流水も去り、斜里川河口にカモやカモメ類が数を増しましたがクビワキンクロの姿は確認できませんでした。今年の冬に再び姿を見せてくれるのか、今から楽しみにしています。

〒099-41 斜里郡斜里町朝日町43-14

ワキアカツグミが来た！

森 純 子

2月8日、その日は家の横の公園で子どもにそり遊びをさせていました。レンジャクかマヒワがその辺に来てないかなと、私は子どもを遊ばせつつチラチラ鳥影を探してました。もうそろそろ帰ろうかなと思った時、目の前のシラカバの木に一羽の鳥が飛んで来ました。

ツグミかなと双眼鏡をのぞいたとたん「ん?!ちがう!」と心の中で思わず叫び声。あるべき羽のオレンジ色がなく、そのかわりにわきがオレンジ色なのです。

「こんな鳥、初めて!」ハチジョウツグミかワキアカツグミか、と頭をよぎったものの、図鑑は持ちあわせていず、心の動揺を押さえつつ、その鳥の特徴を必死で頭にたたきこみ、その姿をまぶたに焼きつけていたのでした。眉斑はくっきり、あごに濃い黒の線がある…。



それにしても、こんな時、横にバードウォッチャーがもう一人いてくれたら、どんなに心落ちつくでしょう。「ね、ツグミと違うもんね。」と互いに確認できるし。

でも横にいるのは3歳の息子だけ。「私、頭が変になって、幻をみているのかしらん。」などと思いつつ、飛び去るその鳥を見送り、家に帰ったのでした。

そして図鑑で見ると、やはりどう見てもワキアカツグミ。でも帰宅した主人にそのことを説明しても「ふーん、そう。」と、ようわからんという顔。今一つ不安な気持ちでした。

それから2日後、昼食をとるために帰ってきた主人が「おまえの言ってた鳥がまた公園に来てるぞ!」とかけこんできました。主人は大急ぎでカメラをセットし、私は双眼鏡をひつつかんで公園へ走ると、やはり図鑑で確かめたとおりのワキアカツグミ。主人はパチパチシャッターを押し、私は「頭が変になったんじゃないかって良かった。」と再びその姿を堪能したのでした。

た。」と再びその姿を堪能したのでした。

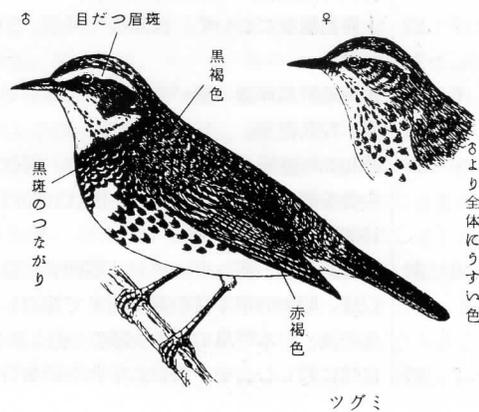


ワキアカツグミは、北欧からシベリアにかけて繁殖し、日本ではかなり珍鳥らしく、その後、バードウォッチャーたちの間で話題となり、一ヶ月程そのワキアカツグミは滞在してくれたのですが、その間、次から次からバードウォッチャーが集まって来て、その姿を楽しんでました。

でも鳥って翼があるから、本当に何がどこに出るか、予想もつかないものですね。これまでもいつも双眼鏡を首からぶらさげていた私は、これ以来、ますます双眼鏡を手離せなくなり「いつも心に太陽を、そして首には双眼鏡。」などと口ずさみつつ、買い物に行く時も子どもと遊ぶ時も、「何かいないかなあ。」と鳥の姿を追っかけてるしまつです。

もうどこかへ行ってしまったあのワキアカツグミ、なんとか無事にシベリアに帰りつき、また来年の冬、札幌に来てくれたりなんかしたら、最高ですまね。

〒062 札幌市豊平区羊ヶ丘森林総研宿舍213-6



愛護会のあゆみ

年月日	主な出来事
昭和 44 11 18	野鳥愛護団体設立準備会を開催し、準備会会長に北海道鳥獣審議会委員長の犬飼哲夫氏を選出。会の名称を「北海道野鳥愛護会」に、会誌名を「北海道野鳥だより」とし、事務局を道林務部林政課獺政係に置く。
45 2 10	設立準備会により「北海道野鳥だより」第1号（10頁）を発行し、入会案内を行う。会費、年額個人300円、団体1000円。
5 9	北海道野鳥愛護会設立総会を札幌市労農会館において会員43名参加のもとに開催し、会則の決定、役員選出を行い、「北海道野鳥愛護会」が発足する。初代会長に犬飼哲夫氏を選出。副会長4名、監事2名、幹事10名、参与7名、合計24名を役員に選出。事務局を北海道国土緑化推進委員会内に置く。会員数 個人212名、団体9。
5 10	第1回探鳥会を江別市の野幌森林公園において開催。49名参加。
5 16	野鳥教室を札幌市中小企業会館において開催。講義：安田鎮雄「野鳥保護」、百武充「野鳥の分類」、野村悟郎「野鳥の判別」
46 1 23	第1回新年懇談会を札幌市の林業会館において開催。会の運営、会報の発行等の自由討議、スライドの上映、以後、毎年同様の形式で開催。
7 3 ～4	大雪山国立公園、愛山溪温泉～沼の平において探鳥会を開催。42名参加。
47 2 20	藤の沢・小沢広記宅で、給餌台にくる鳥の観察会を開催。50年以降は、1月の恒例探鳥会となる。
6 18	講演と映画の集いを札幌農林会館で開催。自然保護協会と共催。60名参加。
7 22 ～23	十勝岳温泉において、探鳥会を開催。30名参加。
48 5 14	北海道野鳥保護の集いを開催。北海道と共催。72名参加。
6 16	昭和48年度総会において、会則の一部改正会費を個人300円を600円に、団体1000円を1500円に値上げ。
9 30	第1回全国一斉シギ・チドリ類調査に協力以後、昭和57年4月の第18回まで協力し、その後、日本野鳥の会各支部の分担となる。
49 7 27	自然に親しむ会を、東京大学北海道演習林

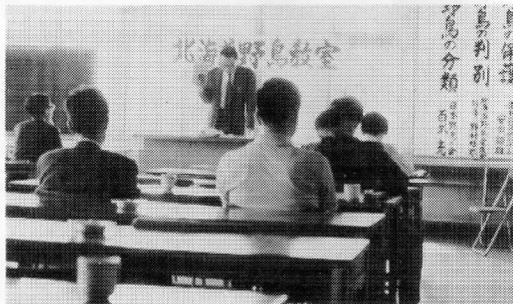
▼昭和45年5月 創立総会にて正式に発足する



▼昭和45年5月 第一回探鳥会・野幌森林公園



▼昭和45年5月 野鳥教室を開催



▼藤の沢探鳥会（小沢広記宅で）





▲北の野鳥写真展
(三菱信託銀行)



▶昭和60
の
い年
第38回全国野鳥保護



▼平成5年
クマゲラー斉調査
(野幌森林公園)



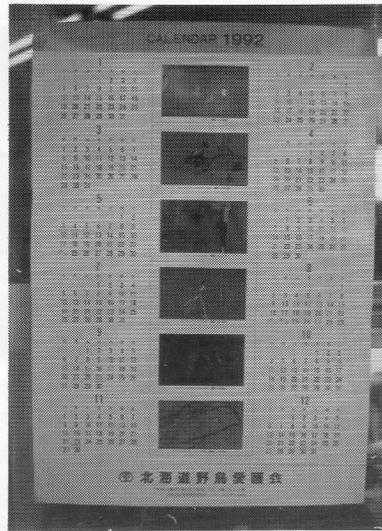
▼私たちの探鳥会
17年の記録

- 50 2 16 において、北海道自然保護協会と共催。
- 野幌森林公園において、スキー探鳥会を開催。以後、本会の冬の恒例探鳥会となる。
- 52 4 9 総会で会則の一部改正(会の目的、役員に関する事項等)、会費を(個人600円を1000円に、団体1500円を3000円に)値上げ
- 53 4 15 総会(会務の自主運営をめざす)
- 54 6 6 「北国の野鳥写真展」を三菱信託銀行札幌支店で開催。
- 6 11 事務所を北海道自然保護協会内(中央区北1西7)へ移転。
- 55 4 19 総会において、会費の値上げを決定(個人1000円を1500円に、団体3000円を4500円に)
- 第2代会長に井上元則氏が就任。
- 6 21 旭川野鳥の会・日本野鳥の会旭川支部との交流探鳥会を、湧別温泉にて行う。
- 56 12 - エゾフクロウ(本会のシンボルマーク)のネクタイピンとタイタックを製作・販売。
- 58 2 21 野鳥だより第50号を記念特集号として発行
- 8 30 第一回の「前田一步園賞」を本会が受賞、釧路支庁で表彰式が行われる。
- 59 4 21 昭和59年度総会において、第3代会長に菅野寿衛吉氏が就任。
- 9 21 会員名簿を作成し、会員に配布。
- 12 21 野鳥絵葉書「北海道の珍鳥」を作成し、会員に配布。
- 60 5 12 「全国野鳥保護のつどい」が野幌森林公園で開催され、本会が協力。
- 62 4 18 昭和62年度総会において、第4代会長に柳沢信雄氏を選出。
- 63 4 15 北海道自然保護協会の移転に伴い、本会の事務所が加森ビル6階(中央区北3西11)に移転。
- 6 21 「私たちの探鳥会-探鳥会17年の記録」を出版し、会員に配布。
- 7 19 札幌市教育文化会館で「私たちの探鳥会-探鳥会17年の記録」の出版記念式を開催。
- 平成 北海道野鳥だより80号を会創立20周年記念号として発行。
- 2 7 21 創立20周年記念のエゾフクロウのネクタイピンとタイタックを製作・販売。
- 9 21 札幌市婦人文化センターで、屋子廉彰氏を講師に新年懇談会が開催される。
- 3 1 12 平成3年度の総会が札幌市民会館で開催される。
- 4 13 北海道電力エレナードギャラリー及びたくぎん地下キャッシュサービスコーナーで野
- 4 24

鳥写真展を開催。

- 10 - 平成4年用の野鳥カレンダーを独自に製作し、販売する。
- 4 1 11 札幌市婦人文化センターで、石城謙吉氏を講師に新年懇談会が開催される。
- 4 18 平成4年度の総会が札幌市民会館で開催される。
- 5 6 北海道電力エレナードギャラリー及びたくぎん地下キャッシュサービスコーナーで野鳥写真展を開催。
- 5 1 9 札幌市女性センターで、石川信夫氏を講師に新年懇談会が開催される。
- 4 17 平成5年度の総会が、札幌市民会館で開催される。
- 5 7 たくぎん地下キャッシュサービスコーナーで野鳥写真展が開催される。
- 8 4 北海道電力エレナードギャラリーで野鳥写真展が開催される。
- 6 1 4 札幌市女性センターで、織田敏雄氏を講師に新年野鳥講演会が開催される。
- 4 9 平成6年度の総会が、札幌市民会館で開催される。会費の値上げを決定（個人1500円を2000円に、団体4500円を5000円に）。
- 5 10 たくぎん地下キャッシュサービスコーナー及び北電エレナードギャラリーで野鳥写真展が開催される。
- 7 1 22 藤の沢探鳥会において、創立25周年記念のスライド映写会が行われる。
- 2 23 創立25周年記念の香港探鳥ツアーが行われる。～26
- 4 8 平成7年度の総会が札幌市民会館で開催される。
- 5 8 たくぎん地下キャッシュサービスコーナーで野鳥写真展が開催される。
- 5 20 創立25周年記念の野鳥講演会が正富宏之氏を講師に、札幌市女性センターで開催される。

▼円山探鳥会



◀平成4年度 カレンダー

▼鶴川探鳥会



▼小樽港探鳥会



▼ウトナイ湖探鳥会



北海道野鳥だより

総目録

(第80号～100号)

表紙		号	各地の野鳥	号
カワセミ	千葉 広	80	小樽海岸の野鳥	中野 高明 80
ホウロクシギ	小堀 煌治	81	堀株川河口及びその付近の鳥類	
ハシビロガモ	難波 茂雄	82	—春の水鳥を中心として—	富川 徹 83
オオワシ	石橋 孝継	83	錦大沼の野鳥	鷺田 善幸 84
ノゴマ	遠藤 茂	84	栗山町の鳥類	沼野 正博 85
キリアイ	柳澤 信雄	85	利尻島における野鳥観察リスト	小杉 和樹 86
ヤマセミ	赤石 誠二	86	石狩川水系 生振・茨戸川流域の野鳥	
オオホシハジロ	新城 久	87	” (補説)	泉 勝統 88
ウトウ	遠藤 幸子	88	大沼公園の野鳥たち	田中 正彦 90
ルリビタキ	野坂 英三	89	幌別川と野鳥たち	本多 進 92
ケイマフリ	佐藤 幸典	90	美唄の野鳥目録	草野 貞弘 93
シロフクロウ	若林 信男	91	豊平川バードウォッチング	
ベニバラウソ	遠藤 幸子	92	—札幌市中心部の一—	戸津 高保 94
コウノトリ	新城 久	93	根釧原野の野鳥	金沢 裕司 95
ヤマセミ	赤石 誠二	94	石狩川水系 生振・茨戸川流域の野鳥(2)	
シマエナガ	松野 有秀	95	泉 勝統・新城 久	95
キマユツメナガセキレイ	富田 寿一	96	1991 旭川周辺地域の野鳥目録(大雪山を含む)	
コウライキジ	柴田 直臣	97	石川 信夫	97
トモエガモ	森田 崇司	98	支笏湖畔国民休暇村周辺1994年4月の探鳥記録	
ハシジロアビ(夏羽)	本多 進	99	柳澤 信雄	99
ソリハシセイタカシギ	山田 良造	100		
私の探鳥地		号	観察記録	号
屯田防風林と創成川	矢野 玲子	82	北海道に舞い降りた迷鳥たち(5)	
ノスリが渡って来た—砂崎海岸にて—	石谷 義一	83	同(6、7、8、9、10)	山田 良造 84~88
栗山町「御大師山」 おっとりクラブ	中井 惺	84	話題の野鳥たち(1、2、3)	井上 公雄 81~83
えりも岬付近	井上 公雄	85	探鳥旅行記	
余市川	赤石 誠二	87	「英国の鳥 小事情」	犬飼 弘 80
野幌森林公園	芹沢 裕二	89	サハリンバードウォッチングの旅(2)	柳澤 信雄 82
札幌市福井周辺	渋谷 弘子	90	吉野ヶ里のカササギ	武沢 和義 83
藻岩山	山本 一	92	香港探鳥の旅	矢野 玲子 89
我がフィールド—十勝川—	土田 光子	95	「ニューヨーク探鳥記」	
新川河口	野坂 英三	96	(ルノワール・セントラルパーク)	和久 雅男 91
口無沼(クチナシヌマ)	佐藤 正秀	97		
モエレ沼	栗林 宏三	98		
若見沢公園・市民の森	若林 信男	99		

「創立25周年記念行事」			鳥たちの歌あれこれ	新妻 博	98
香港探鳥の旅に参加して	井上 公雄	100	霧晴れのエトピリカ	道場 優	98
香港の鳥達との出会い			円山公園周辺野鳥目録	山田 甚一	99
	梶浦 孝純・早坂 泰夫	100			
			報告、お知らせほか		号
鳥 学					
ヨーロッパクロマツとドバトとイスカ			平成1年度 総会報告	編 集 部	80
	齋藤新一郎	81	平成2年度 "	"	84
エゾライチョウ1993	藤巻 裕蔵	92	平成3年度 "	"	88
図書紹介			平成4年度 "	"	92
鳥類関係の図書紹介	極東鳥類研究会	80	平成5年度 "	"	96
「南ウスリーの鳥類1、2、3」	藤巻 裕蔵	94	平成6年度 "	"	100
			平成2年度 誌上写真展	編 集 部	82
主張・提言・随想ほか			平成3年度 "	(1)	85
80号を記念して	会長 柳澤 信雄	80	"	"	86
北海道野鳥愛護会20周年に寄せて			平成4年度 "	"	89
	百武 充	80	平成5年度 野鳥写真展の展覧作品		
これまでとこれからの20年	野村 梧郎	80	平成6年度 誌上写真展	"	98
20周年記念誌に寄せて	高梨 敏子	80	平成7年度 野鳥写真展の展覧作品	"	100
20周年に託して	宗澤美佐子	80	創立20周年記念 ネクタイピンとタイタックの発売		
愛護会20周年に寄せて	野坂 英三	80		編 集 部	81
この場をお借りして	道川富美子	80	ビデオ「野幌森林公園の四季」斡旋	"	83
今は昔…	溝部 泰子	80	野鳥カレンダー(1992年度)の発売		
野鳥との付き合いと責任	森 拓人	80	一本会の立案・企画による	"	85・86
自然保護は忙しいが楽しい(2)	隅田 重義	80	エゾライチョウの観察記録をお送り下さい		
" 学ぶべき事実が実に多い "		84		藤巻 裕蔵	89
「水辺の鳥」の初心者用識別表	田辺 至	81	25周年記念「香港探鳥の旅」案内	編 集 部	97
自然環境部をよろしくー北海道環境科学研究センターー			狩猟鳥獣の種類について(平成6年10月1日以降)		
	村野 紀雄	86		編 集 部	99
鳥見人からの便り 浦幌のハクガン			25周年記念講演会について案内		
	武藤 満雄	86	ー講師 正富 宏之先生ー	編 集 部	99
" アネハヅルの飛来	掛川 岩太	86	追悼の辞		
" 偽闘	和田 淳	87	井上元則先生 御逝去	柳澤 信雄	80
" 水鳥は泣いていた	新城 久・泉 勝統	91	荻野寿衛吉先生 御逝去	柳澤 信雄	82
バードヒアリングの楽しみ	田辺 至	88	野村梧堂さんを悼む	小堀 煌治	86
フィールドマナー	柳澤 信雄	89	松本光二さんを悼む	山田 良造	86
クイナに思うこと	武沢 和義	90	小澤広記さんを悼む	小堀 煌治	99
野鳥の俳句(前編)	齋藤新一郎	90	鳥見人からの便り 思い出の人「野村さん」		
" (後編)	"	91		隅田 重義	89
「雀の同居人から…」	高崎 一夫	91			
野鳥のカルタ	三船 幸子	91			
早起きは三文の得 静内野鳥連絡会会長					
	谷岡 隆	91			
記録は語りつづける…記録写真を主題として					
	隅田 重義	96			
ワープロ・パソコンで全国バードウォッチング					
(パソコン通信のお誘い)	久田 伸一	96			



冬の野幌探鳥会

7. 2. 12

戸津 以知子

藤の沢探鳥会に続き、平成7年度2度目の探鳥会。今年になって初めての探鳥会参加という人も何人かいて、空模様を気にしながらのスタートでした。

いました～例のフクロウ。大木のニレの木の上にちゃんとー。時々首を廻したり、目を細く開けたりしてー。しばし観察しました。森の守り神を見たあとは森のシンボル、クマガエラを見たいものと皆んなの関心は高まった様子。12月、1月と見ている人が何人かいて、私も2回程前に見ているので声を聞けるかもしれないと期待しました。今日は残念ながら出合えませんでした。

集合地点でフクロウに見守られての鳥合せ。終了と同時に予報どおりの雨が降ってきました。このフクロウが心ない一部の人々によってねぐらを放棄する事のない様、願わずにいられませんでした。

〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1-14

〔記録された鳥〕フクロウ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ウソ、カケス、ハシブトガラス 以上16種

〔参加者〕吉田久子、野坂英三、前田順治、高木、高木幸子、竹中昭雄、柳沢信雄、矢野玲子、久保田喜代美、犬飼弘、戸津高保・以知子、玉田義一・紀美子、西田都、香川稔、宇野節子、住吉道子、小野寺治夫、松本和子、後藤義民、以上21名

〔担当幹事〕矢野玲子、戸津高保

円山公園探鳥会

7. 3. 5 竹中 昭雄

これまで野幌の歩きましようには数回参加していましたが、円山公園探鳥会は今回が初めてでした。

冬ごもりの虫も動き始めると言われる啓蟄を翌日に控えた3月第一日曜日、春が間近か来ているはずですが朝の最低気温は-10℃、9時の集合時間になってもかなりの寒さを感じました。その代りお天気は雲一つない青空、風もなく絶好のウォッチング日和になりました。出発前のミーティングで、円山公園を庭のように熟知され

ている山田さんの労作“平成6年円山周辺月別確認野鳥”のプリントが全員に配られました。3月の欄を見ますと、特にこの時期にしか確認されなかった鳥として、アトリ・マヒワ・ウソ・キクイタダキなどの名前がありましたので、期待に胸をふくらませ歩き始めました。

公園入口付近の広場には、ツグミ・ムクドリ・ヒヨドリの小群が飛び交い、アカゲラも見かけました。裏参道の鳥居、開拓神社、駐車場の周辺ではカラ類がいつもながらめまぐるしく動いていました。

そして今日の主役ウソのカップルの登場となりました。表参道から杉の木立ちで区切られた20本ほどある桜の一本の枝先で、一心に新芽をついばむ一つがいのウソに一同の足が止りました。見上げると澄んだ空の青の中に雄の喉元のバラ色、雌の頭部のピロードのような艶やかな黒色が特に印象的でした。

神社本殿に通ずる参道と隣合せ、北一条通にも近く車の騒音も気になる場所でしたが、その時だけはポカッと静かな空間が出来たように思われ、しばらく時間の経つのも忘れ見入っていました。

また番外編として、終りのミーティングの時、最後部を歩いていた方からオオアカゲラがいたとの報告がありましたので、解散後有志の方々とその場所まで案内をしていただいて戻りました。彼はまだその木で採餌しており、一分間程でしたがその様子をしっかりと見ることが出来たのも幸いでした。

野鳥に接して日の浅い私はまだ観察した鳥が少なく、それ故探鳥会に参加する毎に、新しい鳥との出会いがあり、大きな喜びを得ることが出来ます。これからも次はどんな感動を持てるかを楽しみに参加したいと考えます。

毎回お世話下さる幹事の皆様、またいつも丁寧に教えていただく先輩の方々に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

〒001 札幌市北区北30条西6丁目

〔記録された鳥〕コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アトリ、カワラヒワ、ウソ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シメ、ドバト 以上21種

〔参加者〕五十嵐加代子、石橋和子、大西典子、小川祐子、鎌田玲子、白澤昌彦、武沢和義・佐知子、竹中昭雄、戸津高保・以知子、野坂英三、榛葉貴博、久田伸一、森茂太・純子・林太郎、矢野玲子、柳沢信雄、山田甚一、山田良造、山本智子 以上22名

〔探鳥幹事〕武沢和義、矢野玲子

ウトナイ湖探鳥会に参加して

7. 3. 26 浜塚恵美

3月26日、探鳥会に参加させて頂きました。風の冷たいウトナイの薄水を割りながらガシャガシャ歩く白鳥と平気で歩くオナガガモの姿が楽しく、その頭上を旅客機が飛んでゆきました。

ベテランの方の望遠鏡をのぞかせてもらい、アオサギ、オオワシ、ミコアイサ等特長ある美しい姿に感激しました。私の真新しい薄いハンドブックに比べ、どのページもカラーペンで色どられ年季を思わせるぶ厚い図鑑に圧倒されつつ、ヒシクイがガンの仲間と初めて知り、見てもはっきりとはわからず、ただ楽しくて双眼鏡をのぞいていただけの私でした。

ガン、カモの群れが一斉に飛立ち、白鳥がゆったりと遊んで、向う岸にはオオワシが悠然と胸を張り、中洲にはアオサギが美しく佇んで、サンクチュアリの餌場ではシマリスの姿も可愛くて、この心和やかな景色がずーっと続いて欲しいと願わずにはいられません。

自然破壊が進むなか、一日に何種類の生物が地球上から消えていくと聞いています。目に見えない所で私もまたそれに加担しているのだと思います。台所の食器洗い一つとってみても工夫次第で随分違うでしょう。一人一人が自覚し身近なところから始められる事は沢山あります。

美しい、めずらしい鳥を見て改めて考えるきれいな海川、緑の野山、大事にしていこうと思いました。

〒061-12 札幌郡広島町字大曲792-26

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、ヨシガモ、マガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、アカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、スズメ、ハシボソガラス 以上27種

〔参加者〕野坂英三、牧野洋子、伊藤聖子、栗林宏三、望月勲、広川淳子、高屋敷征子、浜田強、吉田司・行子、井上公雄、富田寿一、三船喜克・幸子、森田新一郎、伊藤正秀、伊藤慎一郎・博見、浜塚恵美、戸津高保・以知子、羽田恭子、成沢里美、木村与吉、野表智恵子 以上25名

〔担当幹事〕富田寿一、戸津高保

野幌探鳥会

7. 4. 16 小川祐子

ほんの少しの興味で何気なく探鳥会に参加したのが去年のゴールデンウィーク。私と友人はそれ以来すっかりバードウォッチングにはまってしまいました。鳥の姿をじっくり見ても自分達だけでは何だかわからず、図鑑を見て“こんな感じだからコレだということにしておこう”などというあやふやな事もありがちですが、それでも去年から見れば随分たくさん鳥の名前を覚えたと感じます。

昨年何回か野幌には参りましたが、昨年の秋探鳥会に参加した時は紅葉がとてきれいだっただけで、3月のクマゲラ調査の時は白一色。そして今回の探鳥会では残雪の中あちらこちら草木が芽吹いており、都会ではなかなか実感できない自然の移り変わりを目にする事ができました。フクジュソウと共に土から頭を出している何やら毒々しい赤い色の植物があり、不気味だなあと感じていたのですが、愛護会の方から「これはゼゼソウ」と教えて、なるほどそう言われてみるとかわいらしく見えてきました。

森林内ではドラミングが聞こえ、ヤマゲラ・コゲラ・アカゲラを見ることができました。また、カラ類が囀っており耳慣れない複雑な鳴き方をするので、その度に何の鳥だろうかとドキドキしてはお馴染みの鳥だとわかりまだまだ勉強不足だなあと痛感しました。

今回初めて見られた鳥はキクイタダキ・マヒワ・ヱナガなどです。特にエナガはとてかわいらしく印象的でした。松川の池では初めてキンクロハジロを見ることができました。白と黒のコントラストがハッキリしていてなんとなくユニークに思われました。また、カイツブリのけたたましい声が響いていて、なんとか姿を見ようと少しの間粘ったのですが残念ながら見れませんでした。家に帰って図鑑を見たら“ヒナを背中に乗せることができる”と書いてあったので、いつかはそんな姿もぜひ見たいと思います。

バードウォッチングを始めてから我が家でもバードテーブルを設置しました。琴似の住宅街なので、やって来るのはヒヨドリ・ツグミ・スズメくらいですが、その愛らしい姿を見てとても嬉しく思います。1年前には、庭に鳥を招くことになるとは思ってもいなかったのに、今では毎日来てくれる鳥達を見て不思議な感動を覚えています。

これからは夏鳥の楽しみな季節になるので、探鳥会にも積極的に参加して行きたいと思います。

いつもお世話してくださるスタッフの皆様ありがとうございます。これからもよろしくお願い致します。

〒063 札幌市西区琴似1条5丁目3-3

[記録された鳥] カイツブリ、アオサギ、トビ、ハイタカ、オオタカ、オシドリ、コガモ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、キセキレイ、ヒヨドリ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、カケス、ハシブトガラス、以上28種

[参加者] 小川祐子、榛葉貴博、木佐木淳二・翠子、今村三枝子、吉田慶子、後藤義民、野表智恵子、佐藤誠子、伊藤裕二、柳沢信雄・千代子、森田新一郎、知花 優・優太郎、山本智子、大槻日出、犬飼 弘、矢野昭二・玲子、山田基一・玲子、近藤綾子、田辺英之・久子、渡辺一夫、伊東裕二、若井 聡、栗林宏三、南 勇、山田良造、小西敏光、清水朋子、稗貫俊文・菜緒子・由香利、広船直人・美智子・真由加、鎌田玲子、大西典子、中村長久・節子、目黒和子、永田秀男、森 茂太・純子、柳榮治郎、戸津高保・以知子、久保田、小西由紀子、細川英雄、井上公雄、以上54名

[担当幹事] 井上公雄、栗林宏三

宮島沼探鳥会

95. 4. 23 溝井 茂

「こんなこと！」もあるのである。

沼一面に浮かぶマガンを観察するはずが、集合時刻に沼にはただの一羽もマガンの姿がなかったのです。

ご存じの方も多いと思いますが、この時期、日本で冬を過ごしたほとんどのマガンがこの狭い沼に集結し、その数3万とも4万とも言われ、壮大な景観となります。参加者の全員が、湖面を埋め、三々五々飛び立ち、あるいは沼に戻る圧倒的な数のマガンの姿を想像していたことでしょう。

集合場所の大富会館に着くと、小雨の中、駐車場で参加者を案内していた幹事の山田氏は一言「全然いません」とがっかりした様子です。事前の下見までして準備していたとのことですが、相手のあることですから仕方ありません。やむなく会館内で、永くマガンを調査しておられる星子氏のお話を聞くことになりました。宮島沼で過去に撮影されたビデオを参考に、マガン、ヒシクイ、オオハクガン、ハクガン、いくつかのカナダガンの亜種について解説があり、特にカナダガンの亜種については

大きさや頸の白輪等が亜種の判別に役立つとのことでした。また、マガンは早朝に沼を飛び立って周辺の水田で落ち穂などの餌を食べ、日中は沼で休息して夕方再び採餌に向かうそうですが、当日のような雨天の日には日中も沼をでることが多いということです。その後、湖畔に出て観察を行いました。雁の類は5羽のヒシクイだけです。

そのうち、周辺を探索していただいたところ、さほど遠くないところの水田にマガンの群が見つかったので車で移動し、めでたく観察することができました。

マガンを観察後に解散となり、単独で周辺を歩き回って、旧美唄川堤防周辺でオオジシギ、ホオアカ、ノビタキ、カワアイサ、コチドリを観察。午後になって宮島沼に戻ってみると湖面の三分の一程度にマガンが入っており、湖畔から間近に観察することができました。

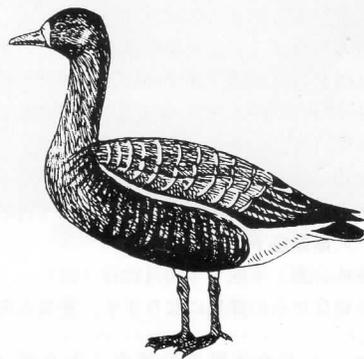
さて、私は20年前に会に入ってから、転勤を繰り返す間に縁が切れておりましたが、この度札幌に来て復帰しました。愛護会の探鳥会に参加するのも14年ぶりになりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

〒062 札幌市豊平区月寒東3条18丁目1-33-202

[記録された鳥] カイツブリ、アオサギ、トビ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ハシヒロガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラガン、以上26種

[参加者] 木佐木淳二・翠子、田辺英之・久子、白沢昌彦、森 茂太・純子、林太郎、小堀煌治・慶子、井上トミ子、原橋 進・玲子、若林信男、竹腰、越後 弘、青江 正、星子廉彰、溝井 茂、山田良造、戸津高保・以知子、井上公雄、以上23名

[担当幹事] 山田良造、井上公雄



マガン

鳥民だより

◆会費の納入についてお願い

平成7年度分の会費の納入につきましては、同封の納入状況をご参照のうえ、ご面倒でも郵便振替用紙により、お振り込み下さるようお願いいたします。

また、平成6年度またはそれ以前の会費未納の方は、併せてお振り込み下さるようお願いいたします。

郵便振替口座 02710-5-18287

◆平成7年度 野鳥写真展 出展目録

会期・会場 5月8日～27日 たくぎん本店

氏名	鳥名	撮影年月	場所
石橋 孝継	アオバズク	5. 6	千歳
	ウミアイサ	3. 1	小樽
石橋美津子	タンチョウ	5. 6	鶴居
	オオマシコ	7. 1	標茶
伊東 裕二	コチドリ	7. 4	江別
荻原 俊男	ゴジュウカラ	6. 3	西区
	アカゲラ	6. 1	中央区
富田 寿一	ベニマシコ	6. 7	野付半島
	カワセミ	4. 9	恵庭

柳沢 信雄	アオサギ	7. 1	江別
	アメリカヒドリ	7. 1	苫小牧
山田 良造	カワガラス	5. 4	南区
	ヒレンジャク	7. 2	野幌
小堀 煌治	チュウサギ	6. 8	石狩河口
	カワラヒワ	6. 4	南区
遠藤 茂	オガワコマドリ	6. 10	石川県
	サンコウチョウ	6. 5	静岡県
遠藤 幸子	ヤイロチョウ	6. 5	石川県
	ヒメインソヒヨ	5. 5	〃
佐藤 勇	コサギ	6. 8	石狩河口
	キビタキ	6. 5	清田
佐藤 幸典	オナガガモ	6. 2	苫小牧
	ソリハシセイタカシギ	6. 6	〃
三船 喜克	ツツドリ	6. 5	支笏湖畔
	コジュリン	6. 6	青森県
渋谷 信六	カラシラサギ	6. 4	石狩
	アカゲラ	6. 6	西区
新城 久	オオワシ	6. 3	羅臼
	オジロワシ	6. 3	〃

探鳥会案内

〔鶴川〕平成7年8月27日(日)

平成7年9月10日(日)

鶴川の河口干潟でメダイチドリ、ダイセン、アオアシシギ等のシギチドリを観察します。アジサシ、チュウヒの記録も多く、どんな鳥に出会えるか楽しみです。長靴の用意が無難です。

集合=9:30 JR鶴川駅前

交通=道南バス(浦河行き)札幌駅発8:00、鶴川駅通り下車

〔鏡沼・宮島沼〕平成7年10月15日(日)

鏡沼はカイツブリ、カモ類を身近に見れる沼です。宮島沼には越冬のため南下途中のマガン、カモ類に混じりカムリ・アカエリ・ミミカイツブリ等が観察されることもあります。

集合=10:00 大富会館前

交通=中央バス 岩見沢ターミナル発(月形行き)

大富農協下車、徒歩15分

〔野幌森林公園〕平成7年10月22日(日)

紅葉を見ながらの探鳥になります。夏鳥と冬鳥の入れ

替わりの時期です。今年生まれの若鳥もほぼ一人立ちの元気な姿を見せてくれます。

集合=9:00 大沢口駐車場入口

交通=夕鉄バス(文京台線)新さっぽろ駅発、大沢口公園入口下車、徒歩5分

〔野幌森林公園を歩きましょう。〕

平成7年9月17日(日)10月1日(日)

集合=9:00 大沢口駐車場入口

○いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行きます。

○交通機関には変更等がありますので、利用される方は、各自で再調査をお願い致します。

○昼食、雨具、観察用具、筆記用具をご持参下さい。

○探鳥会の問い合わせは、011-851-6364 柳沢宅まで。

お詫びと訂正

野鳥だより第99号の表紙写真の鳥名表示が校正の誤りのため「ハシジロアビ」がハシビロアビとなり、本多進氏に大変ご迷惑をおかけいたしました。深くお詫びして訂正させていただきます。(広報担当 森田)

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 2,000円 (会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287

☎060 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465